
東方鷹式録

アイダホ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東方鷹式録

【Nコード】

N5957T

【作者名】

アイダホ

【あらすじ】

それは、どこにでも居そうな、鳥と呼ばれる生き物だった。その鳥はある事をきっかけに、人としての生を得る。そしてそのきっかけを与えたのは、八雲紫と言う妖怪だった。少女になった鳥は、八雲紫と共に生きていく事になるのだが…。

始まり、少女になった鷹（前書き）

初めまして、アイダホと申す者です。

華奢な文章ですが、よろしくお願いします。

始まり、少女になった鷹

私は、大空を舞う鳥。

周りの鳥達も、同じように空を飛び、時には喧嘩をしたりする。

周りの鳥が喧嘩をする時、私は、色々と不思議に思ったりする事がある。

あの鳥は、どうして喧嘩なんか、するんだろうか？

あの鳥は、どうして欲しい物を、奪い合ったりするんだろうか？

そもそも、私はどうして鳥と呼ばれているのだろうか？

疑問は尽きなかった。

そして、いつの日か私は、周りの行動に対して、疑問を抱きながら、鳥として生活するようになった。

私を鳥と認識しているのには、大きな理由があった。

それは、ヒトと呼ばれる存在が、私に対して称するからである。

そして、その中でヒトは私を鷹たかと呼んでいた。

鷹と言うのは、私の様な姿をした種類の鳥の事らしい。

どうやら、ヒトと言うのは、私達はどれも似たような姿に見えるらしい。

私にだって、他の子と違う所があるのにな…

例えば、他の鷹と呼ばれる者よりも、綺麗な羽をしている……と思う。

羽だって、毎日水で綺麗に洗っている。

私は、他の鳥とは違うんだ……そんな気がした。

「美しいわね…」

その声は、突然だった。

まるで、私に対して話しかけているような、言いようだった。私は、突然の事にびっくりして、羽を拡げて飛んでしまおう、と思った。

「待ちなさい」

その声を聞いた私は、拡げた羽を閉じて、その人の方に体を向ける。

「どうやら、私の言葉が理解できるようね…気に入ったわ」

それは、鳥である私でさえ、美しいと思える女性だった。
その女性は、金色の髪を靡^{なび}かせながら、私の方に少しずつ近づいてくる。

「驚かせてごめんなさい。あなたの様な綺麗な者を見てしまっ
つい声を掛けたくなったの…」

どうやら、本気で私に声を掛けていたらしい。
私から見ても、この人は変わっているな…と思った。

「あ、今私の事を、変な人だと思わなかった？」

それは、大きな誤解である
変わった人だとは思ったけど、変な人だとは思っていない。
私は、羽を使いながら、誤解である事を証明しようとする。

だが、ヒトで無い自分には、羽を拡げてバタバタする事以外は、
出来なかった。

「あら、羽なんか拡げてどうしたの…
まさか、私を馬鹿にしたりしてないわよね？」

うー…そんな事は無いのにな…

まあ、鳥でしか無い私に、人である、この女性に対して、言葉を伝えるのは、皆無に等しい。

「あら、ごめんなさい。どうやら気に障ることを、言ってしまったみたいね…」

その女性は、そう言う私を両手でスツと持ち上げる。

突然の出来事に、私はただただ、呆然としていた。

そして、その女性は持ち上げた私を、自分の方に向けると、こう話しかけてきた。

「ねえ、私と一緒に来ない？」

その言葉に、私は自分の耳を疑った。

一緒に来ない？

それはつまり、私が貴女の飼い犬……いや飼い鳥にでもなれ……とも言おうのだろうか？

「いえ、少し言葉を間違えたわね…私の元で一緒に暮らさないかしら？」

…これって私を勧誘してるんだよね。

どうしよう、胸の鼓動が激しくなる。

もしかすると、今までとは別の世界が見えてくる。

そう私は思った。

「それで、どうかしら？

出来れば、今すぐにでも、答えを頂きたいんだけど…」

そんな事を言われてもなあ…

確かに、この人に着いていけば、今までとは違う世界が、見えてくるかもしれない。

今の私の考えは、『この人に着いていきたい』が頭に過よっている。

ただし、私には一つ問題がある。

それは、私が鳥であると言うことである。

そして、彼女の様に、言葉を話すことが出来ないと言うことである。

まいった…魅力は有る…んだけど…

すると、その女性は何かを感じ取ったのか、更に私に顔を近づける。

「じゃあ…こう言うのは、どうかしら？」

もし、私の所に来ると言うのなら、右の翼を…
断わると言うのなら、左の翼を拡げなさい」

その言葉を聞いて、どうやら私の考えを、理解してくれたのだと思っ
た。

さて、どうしようかな？

右を挙げれば、この人に着いていく。

左を挙げれば、そのままさようなら…つまり、私の世界は変わら
ないままと言うことだ。

なんだ。最初から、答えは見つかってるんじゃないか。

ここで断れば、私はこのままなんだし…つまりは、ヒトから鳥、
もしくは鷹と呼ばれ続けるだけである。

よし、決まり。

私はその女性に対して、大きく翼を拡げる。

「そう…」

その女性は、そう言うのと、私をそっと抱きつける。

「それじゃあ、あなたには、名前を付けてあげなきゃね…」

そう言う、女性は何かを取り出す。

それは、薄っぺらいヒラヒラとした小さな紙である。

「それじゃあ…貴女の名前は…」

女性はそう言う、その紙を指でなぞっていく。

そして、その紙を私の体に貼り付けた。

すると、どうだろう…

私の体は次の瞬間、光りだし、あっという間に私を包んでいく。

なんだかそれは、とても温かく感じるものだった。

そして頭の中に、何かが入り込んで来るのが解った。

これは、『これからの私』が生きていく上で、重要な知識だと言うのが、臍気ながらも理解した。

そして、光りは徐々に消えていき、目の前にいる女性に再び目線を合わす。

「やっぱり、私が見込んだ通りの美しさだわ。
理解能力もかなり高いみたいだし…」

あれ…なんだか私、大きくなった？

私はそう思い、体を確認する。

「え…」

そこには、今まで無かったものが、映し出されていた。

すらっとした、二本の足に、真っ白な肌の色。

何より、自分の今までの鳥と呼ばれた姿とは、うって代わって、まったく別の物へと変えていた。

その体は、まさしく人と呼ぶに相応しい姿だった。

私は、自分の体の隅から隅まで、少しずつ触れていく。
間違いない、私はヒトに近づいたんだ…

そう私は体をもって感じた。

わくわくが、止まらなかった私は、更に背中の方にも、手を伸ばしてみる。

「あ…」

私は背中を触っていて、あるものに触れる。

それは、私が今まで鳥として生活してきた中で、欠かせなかった物である。

「これって…」

「そう、貴女が今までの暮らしには、欠かせなかった翼よ…」

「ふえ…」

思わず、変な声を出してしまった。

今まで声を出したことが、無かったせいだろうか？

いや、鳴き声ならなんども使った事が有るけどさ…。

「それじゃあ、そろそろ私の名前と、貴女に付けた名前を言うておく必要があるわね…」

女性は、そう言うのと木の棒を探しだし、地面にそれを書いていく。

「私は八雲紫、字で表すところなるわ…覚えた？」

「なるほど…」

どうやら、さっきまでとは、比べ物にならないぐらいの知識が、私に身に付いているようだ。

「それじゃあ、次は貴女の名前よ…姓は私の八雲を使って…」

八雲紫と名乗る女性は、地面に今度は、私の名前を入れていく。

「糸…工…？」

「これで紅と言うのよ。

貴女の名前は、今日から八雲紅、今日から私の式として、共に生きて貰うわよ」

名前…鳥でも無く、鷹でも無い…私だけに付けられた、名前…八雲紅。

どうしよう…嬉しくて何かが、こみ上げて来そうだ…。

「どう、名前は気に入ってくれたかしら？」

「はい、とても気に入りました」

私は手に入れた知識を元に、返事と言う言葉を交わす。

「そう、流石ね…もう私と会話が出来るまでになるなんて…」

その女性、八雲紫は、感心した、とも言わんばかりの表情を浮かべると、私の体をすっとな持ち上げる。

「うわっ」

「あら、ごめんなさい。つつい可愛かったものだから…」

「うう…びっくりした…」

八雲紫は、慌てる私の顔を見つめると、にっこりとしながらこう言ってきた。

「これから、長くなりそうだけど…よろしく」

「え、ええっと…よろしく…」

これが、私の鳥と言う生に別れを告げ、人と言う存在として生活の始まりであった。

その一、鷹の式（前書き）

アイダホです、どうぞ

その一、鷹の式

その鷹は、元々何処にでもいそうな、鳥であった。

だがその鷹は、他の鳥と比べて、一つ大きな違いがあった。それは、自我である。

鷹は、ある時飛び回る中で、下に映る景色の中、人々が、ある言葉を使うことを疑問に感じた。

それは、人が生まれたときに、必ず付けられるものであり、鷹にとって、それは大変羨ましいものであった。

そして、その鷹は心の中で、こう思っていた。

『私にも、人と同じように、名前が欲しいな』

鷹には名前が無い。

鳥には名前が無い。

呼ばれるのは、総称か種類の名前ぐらいである。

自我が強かったその鷹は、名前を持って生きる事が大変羨ましく思えた。

それからしばらくして、その鷹の運命を変える女性と出会った。

その女性の名は八雲紫。

八雲紫は、その少女に対してこう声を掛けてきた。

『貴女、私と一緒に来ないかしら？』

それは、その鷹の運命をひっくり返す程の、言葉であった。

鷹は、その言葉に対する答えは決まっていた。

今までとは、違う世界を見ることが出来る。

鷹は、そう考えただけで胸の高鳴りが止まらなかった。

わたしも…貴女と一緒に生きてみたいです。

この日を境に、鷹は姿形を、少女に変えてもらい、更には、今までに無かったものを頂いた。

八雲紅：

これが、鷹から少女になったと同時に、八雲紫より授かった名前である。

それはその鷹が…いや少女が、最も欲しがった物であった。

「ごうごう！ いたら返事をしなさい」

一人の女性が、こうと呼ばれる者を探しながら、歩いている。

「まったく…何処に行つたのかしら」

その女性は、探している者が中々見つからないためか、少しばかり、顔を膨らませているような感じもする。

「ごうゝ！」

「私なら、ここにはいません、他を当たってください」

近くの木から、声が聞こえてくる。

「あら、そうなの？」

それじゃあ他を探そうかしら…」

女性はそう言うのと、さも諦めたかのように、声とは反対の方に歩き始める。

「あの…紫様……」

今度は、木の方から困ったような声が、聞こえてくる。

「何かしら…って木が私に話しかけるわけが無いわよね」

その女性、八雲紫はそう言いながら、再び足を前にやる。

「あの、本当にすみませんでした…突然貴女を攻撃したりして」

「……」

紫は、ピタリと動きを止める。

「ただ、どうしても私は、貴女を攻撃しなきゃならなかったんです…」

「あら、どうしてかしら？」

「私は、貴女の式神です。貴女の言われた命令なら、ある程度は従います…ただ」

木に隠れている少女、八雲紅は、少し間を置いてから、再び喋り出しました。

「私の羽の付け根を、あまり弄らないでください…」

私は、そこが弱いんですから…」

そう、この少女には、一つの弱点があった。

羽の生えた、一番体に近い付け根の部分を弄れる事が、彼女にとっては、最大の弱点とも言える位置であった。

「だって…」

「あ、また境界を使ったんですか!!」

八雲紫は、いつの間にか、紅の背中に回り込んでいた。

「貴女の反応が、可愛いんですもの」

「ひゃ…ちよっ…やめ…」

背中に回り込んだ紫は、紅の付け根をひたすら、指で撫でてくる。

彼女を式にした女性、八雲紫の得意な力に、境界を操る力である。これにより、八雲紫は隙間を使って、好きな場所に、移動する事が可能である。

よって今回も、紅の背中に回り込む事が出来たのである。

「もう、やめてください。次やったら、本当に怒りますよ」

「へえ、怒ったらどうするのかしら？」

「う…それは…」

怒ってどうすると言われても、少女にとっては、どうこう言う事は無かった。

多分、怒れば怒る程、相手の思う壺なんだろうな…

少女は心の中で、そう思いながら、紫に対して止めてくださいの一点張りで、注意した。

「まあ、今日はこれぐらいで許してあげるわ」

「うえ：なんか、羽がムズムズする…」

鷹から少女になってから、確実に周りを見る世界は変わった。

普段は、人と変わらない姿をしている為、初めて歩くと言う行動も経験した。

勿論、羽さえ広げれば、大空を駆け抜ける事だって可能である。

だが少女は、最近歩いたりする事も多い。

足を使って動けば、また新たな世界が広がる、と考えたのである。

最初のうちは、疲れるだけだったそうだが、最近になって歩く事も、勿論飛ぶことも、更に上達した感覚を少女は体験した。

そして最近になって、八雲紫が最上級の位を、持った妖怪だと言うことを知った。

少女は、その妖怪の式になった事には、不満を一切持たなかった。

「それじゃあ、そろそろ帰るわよ」

「あ、待ってください紫様」

先に帰ろうとする紫に追い付こうと、羽を拡げて、紫の近くにまで飛ぶ。

「さて…これからどうしようかしら？」

「え…？」

「やりたい事は山ほどあるんだけど…」

八雲紫は、そう言いながら、紅の方に顔を向ける。

それに対して、紅は何かを感じ取ったのか、パアと笑顔になって、
こう答えた。

「勿論、ついていきますよ」

「そう、ありがとう紅」

「私は、貴女の式神ですからね」

「そう…それじゃあ、これからもよろしくね」

「かしこまりました、紫様」

鷹としての存在は、紫と出会う事によって大きく揺れだした。

そして、ここに鷹の少女の式神の物語が、始まったのである。

「今度は、触らせませんかね」

「ケチ」

「何でも言ってください」

その二、風之力（前書き）

二話目です、どうぞ

その二、風の力

「なんだてめえは…」

森の中の奥深い場所にて、四人程のガタイの良い男達が、一人の女性に対して、睨み付けている。

「あら、聞こえなかったかしら？ 邪魔よ、道を開けなさい」

その女性、八雲紫はその男達の睨み付けに対して、退くどころか、逆に火に油を注ぐような、言葉を発した。

「てめえ…上等じゃねえか…俺達が、ただの人間じゃねえと言うことを、知って言ってるのか？」

「何でも構わねえ、相手は上玉だ。

少し痛み付けた後に……ってな」

その四人のリーダー格らしき男が、汚らしい言葉で、そう吐いてくる。

「はは、そりゃいいな」

そう言うのと、三人の男は、八雲紫との距離を詰めていく。

「俺達は、人間じゃない。歴とした妖怪だ、それも人を喰らう妖怪なんだぜ」

「俺達は、狼の妖怪だ
お前に、この速さがついてこれるのかよ…」

そう言うのと、一人の男が八雲紫に飛び掛かる。

「喧嘩を売ったことを、後悔させてやる」

その男は、姿を狼に変えて、口を大きく開き、紫に襲いかかる。

「礼儀の無い…妖怪ね」

紫は、そう呟く。

―紫様、そろそろ私が出ても構わないでしょうか―

「構わないわ、軽く痛めつけてちょうだい？」

紫は、聞こえてきた声に対して、そう答える。

「は、何言ってやが…」

男がそう言った瞬間だった。それは突然現れて、男を吹き飛ばした。

男は、そのまま木に激突して、意識を失う。

「な…」

周りの男は、突然の出来事に、驚愕する。
襲いかかった男は、既に気絶をしている。

一方の紫は、一步も動かずに、その場で扇子を手にとって、自分を扇いでいる。

そして、紫の一步手前には、茶色い髪をして、茶色い翼を纏った少女が、その場に立っている。

「な、なんだお前は…邪魔をする気か！」

どうやら、その狼の中で、リーダー格であろう男が、その少女に怒り混もって話す。

「邪魔をする気は無い」

「なに…じゃあ、その場所を開けやがれ…」

そうじゃなければ先に痛い目に逢うぞ…小鳥さんよお」

男がそう言うと、その少女は、にいと軽く頬を上げると、再び話してくる。

「それは無理な相談よ。

この御方を倒したかったら、まず、私を倒さないかね」

その少女は、そう言うと羽を広げて相手を睨んでくる。

その目は、まさに鷹が狩りをする時のような、鋭い目付きそのものである。

「…くっ…お前ら、先に殺れ」

「え、ですが…」

「いいから、行け!!」

男は、仲間の妖怪に、そう怒鳴りつける。

そして、仲間の妖怪は、仕方無く少女と距離を縮める。

「くそっ…」

「ちっ、舐めるなよ」

二人の男は、そう言うと鋭い爪を光らせて、少女に襲いかかる。

「…どうだ」

「…あれ？」

二人の狼男は、その少女に攻撃した瞬間、不思議な感覚に見舞われる。

二人は確かに、その少女を切り裂いたと思い込んでいた。だが、切り裂いた感覚や、その他色々な感触を一切感じ取れなかった…。

何故なら…

「貴方達、いつまでその場所を見ているの？」

二人の背中には、『切り裂いたと思い込んでいた』少女が、鋭い目をしながら、二人を見ていた。

「ひっ…」

「くそ、やばいぞこいつ…」

その姿を見た二人は、その少女に恐怖を覚える。

そしてそのまま、近くに気絶している男を連れて、逃げ去ってしまった。

「お、おい、お前ら逃げんな!!」

リーダー格の男は、三人の仲間が逃げ去るのを見て、怒りを込めながら、大声を出す。

「そんなの知るか、やるならあんた一人でやりな!」

「俺はまだ死にたくねえ」

そう言葉を残し、その男三人は、あっという間に姿が見えなくなつた。

「哀れだわ、狼男」

少女は、その様子を見て、男に対してそう言ってくる。

「てめえ…調子に乗りやがって…」

男の怒りは、この時既に頂点に達していた。

妖怪が喧嘩を売ってきた（元を辿るとこいつが、紫に対して口説いた）

役に立たない仲間、そしてその妖怪の仲間であろう妖怪に、屈辱的な状況に追い込まれた。

怒りの矛は、自然にその鳥の少女、八雲紅に向けられた。

「舐めるなよ、鳥妖怪。」

狼は、肉を喰らう。

もちろんお前のような鳥も例外じゃない!!」

男はそう言うと、自分の速度を上げて、一気に紅の所にまで詰め寄った。

さっきの三人とは、比べ物にならないぐらいの速さである。

「はあ…」

紅は、男のその姿に軽いため息をつく、手の先から何かを集めていく。

「悪いけど、時間は一切与えないからね…」

次の瞬間、その手の先から、風のような物が、吹き荒れたと思うと、一瞬でその男を巻き込む。

「うわああああ!!」

男は、その攻撃に耐えられず、そのまま吹き飛ばされ、何処かに消えてしまった。

「流石は私の式、どうやら私が出る幕じゃ無かったみたいね」

紫は、紅に言って近づく。

だが、一方の紅は少し…いやかなり不機嫌な顔をしている。

「あれ、どうしたのかしら紅ちゃん」

「何が、紅ちゃんですか！

あなたは、もう少し人目を避けて、行動するべきだと私は思います
！！」

紅は、紫に対してそう言葉を発した。

「あら、だって行く手を阻んだのは、あちら側よ？」

「それでもです。

第一、境界を操ればよかったじゃないですか」

「えーめんどくさいわ…

それに私には、貴女がいるんだし、大丈夫でしょ？」

八雲紫は、悪戯っぽく紅に笑顔でそう言うってくる。

「もう…そんな事言ってえ…」

そう言われた紅は顔を少し、紅くした。

頼られて、満更でも無さそうな感じである。紫は、その表情を見

るのが楽しみになってきてたりする。

「あら、照れちゃった？」

「う…まあいいです…」

それよりも、興味深い情報を調べてきました」

紅が、突然表情を変えた為、紫は紅の目を見る。

「それじゃあ、話して貰おうかしら？」

「分かりました…」

私が集めてきた情報は、ある妖怪の事です」

紅はそう言うのと、一度間を置いて再び口を開く。

「九尾の狐の目撃についてです」

その言葉を聞いた瞬間、紫の表情は、さっきまでの緩い表情とは違って変わって、真剣な表情そのものだった。

「へえ、九尾の狐ねえ…」

紅の言葉に関心を抱いた紫は、更に表情を変えてから、こう答えた。

「おもしろそうだわ…話して貰おうかしら？」

その二、風之力（後書き）

次回、九尾の狐…

まあ、あの人が関わってくる…

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5957t/>

東方鷹式録

2011年7月27日22時36分発行